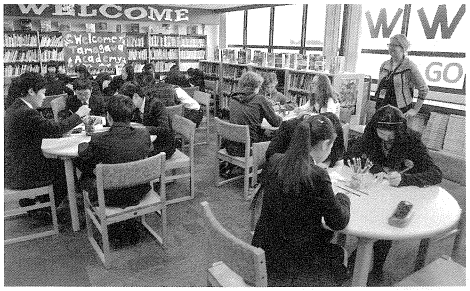
特別レポート②

日本の中学生バンドとして初参加!!
玉川学園小学部中学部吹奏楽部 第70回ミッドウエスト・クリニック同行紀

●文＝鈴木英史（作曲家）
●写真＝波里純次（玉川学園マルチメディアリソースセンター）、黒川圭一（編曲家）



マクラケン中学校バンドのメンバーとの交流会の様子

昨年12月14日～17日に開催された「ミッドウエスト・クリニック」に東京都の玉川学園小学部中学部吹奏楽部（5～9年生［小学5年～中学3年生］66名、指揮・土屋和彦先生）が出演した。近年日本からもバンドが出演しているが、中学生バンドが推薦されたのは初めての快挙。しかも今年はクリニック70周年記念でのコンサート&研究発表で、注目度の高さは格別だった。筆者の作品も演奏されることもあり、玉川学園に同行する形で参加したのでその様子をレポートしたい。

現地の中学バンドと練習そして合同コンサート

ミッドウエスト・クリニックは研究発表の場だ。そのため、プログラミングにも細かい規定（グレード、ジャンル等）が決められている。土屋先生はこのことを重く受け止め、2015年度のミッドウエストに参加し、関係者と打ち合わせを重ね、半年以上かけてプログラミングを練った。結果として、日本のコンクールのサウンド重視のスタイルとは違うものとなり、また玉川の日常とも相まって、参加者から多くの共感を得たことは間違いないであろう。

多くの聴衆の共感を呼んだステージ

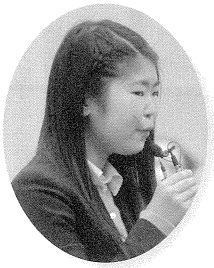
《ファンファーレ・シカゴ》を高らかに奏でるブラス・セクション

玉川一行は、12月11日から19日までシカゴに滞在。シカゴ入りすると、イリノイ州にある「オリヴァー・マクラケン中学校」へ向かう。交流会・合同演奏会の練習を行なうためだ。同中学は、今回のミッドウエストにモデルバンドで参加する熱心な学校で、吹奏楽専用練習場も完備。指導者のチップ・デ・ステファノ（Chip De Stefano）氏はジョン・ペインターに師事したシャイで熱い音楽家だ。彼の指導は、音楽的なポイントを細かく指導し、指揮棒と合奏の流れで全体を作っていくプロのようなリハーサルだ。

玉川学園の子どもたちは、小学校から英語教育を受けているので、合奏も通訳なしでストレスがない。合奏の進め方も普段の玉川のスタイルと同じで集中力の高い充実した時間となった。

マクラケンの吹奏楽部との合同演奏はボイシ州立大学のマルセラス・ブラウン（Marcellus Brown）氏の指揮によるスウェアリンジェンの《インヴィクタ序曲》。またマクラケンのバンドに客演する土屋先生も、D・エーキー《タリス・プレリュード》のリハーサルを通訳なしで行なう。このバンドはセッティングが独特で、ホルンが指揮者の正面一列目、その後ろにサックス、テューバ。トロンボーンは右端という具合。チップ先生に聞くと「これは作曲家のジェイムズ・スティーヴンソンのアイディアだ」という。

コンサートはニールウエスト・ハイスクールの講堂で13日の19時から。開演前の土屋・チップ・ブラウン先生によるプレトークに続き、マクラケン吹奏楽部の演奏、玉川学園の演奏（プログラムはミッドウエストと同一）、合同演奏で締める。もちろん最後はスタンディングオベーション！ スティ・ファミリーを含む多くの聴衆の前でリラックスしたよい演奏が


仲間の存在と音楽に、どれだけ自分が支えられてきたかを話す服部希京さん（中学3年）

《ケンタッキーの我が家の主題による変奏曲》では、佐藤安純さん（中学2年）のユーフォニアムのソロが光った

グレグソン《テューバ協奏曲》を堂々と独奏する川又悠生君（中学3年）